

2002年LWF / WICAS日本 ジェンダー意識調査報告

日本福音ルーテル教会LWF / WICAS 協力委員 俵恭子

- アンケート調査期間 : 2012年2月末～4月
- アンケート対象 : 日本福音ルーテル教会、女性会連盟、NRK
- アンケート回答者数 : 424名 (女性356名、男性65名、性別無記名3名)
- 回答者年齢
 - 【平均年齢63歳】
 - 【回答者年代 (女性/男性)】

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	無記入
3 / 1	12 / 3	15 / 8	29 / 3	32 / 7	82 / 23	114 / 13	33 / 6	1	36 / 1

【回答者地区別】

北海道	関東	東海	西	九州
3教会 19名 NRK 19名	18教会 166名	13教会 85名	9教会 58名	15教会 77名

問1. ジェンダーというカタカナの言葉は

- | | |
|---------------------------------------|-----|
| 1. 自分で使うことがある | 14% |
| 2. 聞いたことがあり、意味もなんとなくわかるが、自分では使ったことがない | 48% |
| 3. 聞いたことはあるが、意味はわからない | 13% |
| 4. 知らない | 22% |
| (5. よく知っているが使わない) | |

【年代別でみると ...】

回答番号	女性	男性	年代									
			90代	80代	70代	60代	50代	40代	30代	20代	10代	年齢不詳
1	48	10	0	2	13	16	8	5	5	4	0	4
2	167	36	0	13	63	50	22	19	11	9	3	13
3	47	8	1	4	17	16	5	1	2	1	0	8
4	84	9	0	16	28	22	3	7	4	1	1	11
5		1			1							
無答	10	1		4	5	2	1					1
計	356	65	1	39	127	104	39	32	20	15	4	37

問2. ジェンダーの観点から「教会内で気になること」は何ですか？

例：女性は教会の大きな集会では男性を立て、黙っていることが多い他

【女性回答】 ●無回答 113名 ●特になし 86名

①ジェンダーという言葉について

- カタカナ言葉は使わないでほしい。使うなら括弧して意味を書いてほしい／言葉を知らないので表現のしようがない／知らないで書けない／わからない／ジェンダーとはどんなこと、どんな学習をするのか？
- 問題を感じ取っていないことが一番の問題なのかも／ジェンダーを特に意識しない
- 食事の支度、片付けを主に女性がやることが多いが、女性が好きでやるという点もあるので、ジェンダーの問題として取り上げて良いかわからない。
- 教会でジェンダーの問題について話そうとしても、なかなか問題点を理解してもらえない。
- ジェンダー・ギャップー男女間にある思考方法、関心度の違い。辞書を引いて初めてこの言葉を知った。それぞれに与えられている賜物は違うので当然。差別はない方がいい。ジェンダー・フリーー社会的文化的に形成された性差別の克服を目指す考え

②男女比と教会役員比率

【問題なしとする意見】

- 女性の活躍目覚ましく男性も一目置いている／女性の行動、言動が活発／はっきり意見を言う人が多く女性が主体的に動いているので気になることはない／今の現状では女性の方がよく発言している（男性が少ない）ので問題はない／パワフルな女性が集まっている／女性パワーが強く頼もしい／自由に発言している／対等に発言している／平等に発言して助けあってやっている／同等、周りも不自由を感じさせない／意見がある時ははっきり発言／ルーテルは女性が70%を占めている観点から問題は解決しつつある／現在は女性代議員も増え発言者も多くなっているのでは？／教会では女性の力の方が強い／役員も男女半々。男だからと立てることもない。役員定年も70なので高齢男性が長く役員をすることもない／男女区別なく役員に選ばれている。女性の働き大きい／役員は以前はほとんど男性、かるうじて婦人会長が役員に加えられていたが、10数年前から選挙の時必ず女性を加え

るよう改善されている／女性会壮年会合同で連盟の聖書研究を行っている。自由に発言／女性がかかり引っ張ってるところあり、言いたいことをいい黙ってることはない／高齢者同士互いに支え合っている／社会経験長く地位のある男性の発言に圧迫感を抱いたが教会内なので自分の意見も言えた。女性としての遠慮はない。聖書の言葉を大切にすべき／仕事が忙しく自分のペースで奉仕しているだけ。会議にでることなく男女差を感じたことはない／女性会員が多いので比較的男女平等に扱われている。代議員にも女性を選出するようにしたり仕事の分担も分け合っている、食堂係も男女の区別はない。男性の奉仕も多い／年齢それぞれ、みな和やかに交わっている／男性が少ないので気になることはない。大勢だったらどうかかわからない／教会に老若男女平等の空気が満ちている／女性牧師なので、男性、女性ということでの意識はしない／男女の区別なく、それぞれの役割を担って責任を果たしている／女性は男性を頼りたがるが、男性が少ないため女性の働きが重要になり役員も多くなっている／少人数で自分にできることを引き受けている。男女が役割分担で頑張ることはない。問題感じない。

【問題があるとする意見】

- 教会役員会等において女性役員が少ない場合、女性の意見が通りにくく又理解していただけて残念に感じたことが多々ある／役員は圧倒的に男性、実働（奉仕、伝道）はほとんど女性／男性だけが代議員をすることはおかしい。誰でも心から神を仰ぎ仕える心があれば教会を代表する役員になっていい／代議員が男性だけというのが気になる／差別があるわけではないが夫婦が教会員である場合夫が役員になるようになる／同じ任についても、挨拶は男性がすることが多い気がする。日本の慣例としてあるのだろう／代議員が男性に偏りやすい／男女比は3:7もしくは4:6だが、教会運営は男性側が圧倒的に多い／女性代議員がまだ選ばれていない。自他ともに力量があると認められる人が少ないのも事実だが、押し出そうという男女会員の意思も小さい／会員数は女性が多いが教会役員は男性が中心に選ばれる傾向があり、女性は少ない。牧師や代議員（男性）を立てる傾向がある／女は黙っておれ。九州男児に多く見られる／九州

という地域性のためか、教区役員に女性の姿が見られない。男性社会の感じ。個々の教会は女性で持っている感が強いのに不思議／関西から九州に来て特に例にあるようなことを感じる。そのせいか意見を通そうとすると女性はケンカ腰になることが多い。教会内では女性は「母」「妻」の役割を与えられることが多く奉仕は多岐にわたり教会の高齢化に伴い疲れていることが多い／女性が3倍も多い中、大きな集会や会議で男性が威圧的にその場の雰囲気や制する場面が何度かあった。／「女のくせに」との男性の発言に驚いた／男性は女性が何か意見を言うのを嫌がるように思う／信徒の比率では女性が多いのに教会役員15人のうち女性は2～3名だった／女性の代議員は増えたが、教区常議員に女性が全くない教区が少なからず存在する／本教会常議員会には、まれに女性の教区長がいる場合を除き、「女性常議員」枠が1名分あるのみ。クォーター制の導入を！

- 身軽に働く男性の姿が少ない。一人でも働く模範になる男性がいると周囲がその姿を見て変えられてくると思う／女性が多く役員も女性が多く女性中心で動いているが、少ない男性達が活動を控えている感じがする／女性は「話過ぎ」のきらい、男性は言うべきことも「言わない」で過ごしている感じ／女性は案外気楽にいろいろ発言するが男性は全般的に活気がない／男性が少ないのが残念
- 集会在男女別にわかれがち／男性、女性の交わりが少ない／受付ノートは女性、男性と欄を分ける必要はあるのか？定例会も男女別で残念／少人数の教会（礼拝出席15名前後）なので女性会とかなくてもいいのでは？／男性会員の3倍以上が女性で、家事的続きのような奉仕、男性が出席しにくい平日、土曜のイベント奉仕も女性だけでやっている。教会全体の運営委員会で話し合おうとしても女性会で話が始まってしまふ。女性会で連盟の聖書の学びに従って当番を決め発題し学んでいるが、女性だけでやる理由が分からない。男子にも声掛けて入ってもらっても居心地が悪そう。小さな礼拝所で女性だけでやることなのか疑問。今後代議員などの役員と女性会の役員の両方を兼ねることになりそうで心配／女性信徒は未婚なら青年会、既婚なら女性会ときまっているのか？
- 牧師を配偶者に持つ女性に対する「牧師夫人」という呼び名や期待される役割には教会におけるジェンダー規範が端的にあらわれている。
- 以前LWF冊子「女性への暴力にNoという教会」が刊行された際、男性の牧師や信徒にはほとんど読まれなかった。ジェンダーという言葉も女性、しかも一部の現状に不満な女

性だけが使用する言葉と思われていて男性自身に関わる問題という認識がほとんど見受けられない。

◎女性自身の問題点

- 能力のある女性はどんどん役員になって活躍してほしい／女性が多く発言権もあり積極的だが、黙することも多いのでもっと一人一人が発言して盛り上げてほしい／役員を引き受ける女性も多くなったが発言力の差はある／発言したことはない／知識がなくて黙っていることはある／女性は教会の中で黙っていることを美德という風潮はあると思う。男性より社会に出ている時間も少ない人が多く男性と肩を並べて大きなことを動かすのは困難なのかもしれない／女性はえてして声を発しない。特に大きな問題は男性達に任せてしまうところがある／比較的女性の立場は確立され発言も行動も自由だが、総合的客観的な見解でなく女性特有の感情的な部分が多い／ジェンダーは女性の意識に問題がある場合もあるのでは（男性を立てて黙っているのは女性の品性とか）／表面的には緩和されてきたが女性自身の自覚が足りない気がする／女性が男性を立てたり、率先して台所仕事をするなど女性の意識も変わらなければならない／女性が意図的に男性に雑事をさせない／女性は男性を立て黙っていることが多いというのは世代にもよるのでは？／女性が喋りすぎ。静かに見守ることも必要／老人施設奉仕に参加するものが少なく決まった女性ばかりだったので定年後の男性にも加わっていただくよう提案したが、「男の人におむつたみはさせられんしね」と言われた／女性の側にも「下手に発言をして何らかの責任を負わされるのは嫌だ」という意識があるように感じる。黙っている方が得あるいは楽という気持ち。発言したいのにできないというより、隠れ蓑にしている面もあるのでは？／個人的雑談の時はいろいろな意見を話す女性たちが大きな集会の場では黙っていることが多い。他人任せで居ることに安住している雰囲気を感じる／女性同士の中での足の引っ張り合いがみられる。

◎高齢の問題

- 年齢的に体力もなく礼拝参加するだけで精一杯、男性に頼ってしまうことが多い／年齢の高い人たちとの差を感じる

③教会内での役割分担に偏りはないか？

【問題なしとする意見】

●男性は少数だが、よく協力してくれる／比較的スムーズに男性女性の協力が上手くできている／男性女性に関係なくやれる人がしている／時代が変わった。性別に関係なく様々な責任を負っているし等しく訓練される必要があると痛感／神の前では平等。最大の奉仕は礼拝に参加すること／各々の個性で交わりを持っている／力仕事は男性が中心になってやっている。それぞれの得意なところで働けばいい／性別に関係なく和やかに過ごしている／女性パワーを発揮、教会行事等にもいろいろと奉仕をし、男女別なく楽しい教会生活を送っている／女性会の月当番の役割に食事作りと後片付けがあり問題意識ももたずやり続けているが、男性も自発的に手伝ってくれる(食器運び、皿洗い、お茶サービス、ごみ収集など)／わが教会は男性が実にまめに動いている／役割分担がしっかりできている。喜んでタラントを活かし合っている／動くことに慣れている若手男性がやってくれる。その人ができることを互いに認め合ってやっていけばいい／教会の働きはジェンダーに基づいているが、得手不得手もあるので否定はできないし、ジェンダーにとらわれない柔軟なあり方が大切だ／封建制、性差別はない。年代差はあるが互いに敬いと優しさを持って接しているので問題ない／女性は男性を立てる傾向にあるが、教会内は他者に気遣いながら奉仕しているのはどちらかというと女性達。いざという時の女性達の結束力、底力は大きい。意見や提案も良くやっている。男女の「特性」はあるので、その時にふさわしい言動をとればよい／女性は得意とする食事や細やかな心遣いで人との関係を気遣うことができる。男性は大工仕事や庭仕事の奉仕をしてくれる。無理せずお互いに感謝しながらすればよい／男性、女性の特性は活かした方がよい。男性も女性の命令で頼めば台所に入り片づけや力仕事をやってくれる／家庭を運営するのと同じく清掃、食事等の奉仕は女性の力なくしてはできません。／礼拝後の奉仕、女性力がないと回らない／家事としてやることと教会内での役割が同じケースが多いが、自然に受け止め「女ばっかし」という意識はない。多勢の場面で意見を言える人は、性格的なものもあり限られている。体験が少なければ尚更で、かならずしも男性を立てているからとは言えない／生活上の役割分担はあるが、特別女性蔑視は感じない／女性だからという制約は感じない。力を発揮して教会でも個人的生活上も自由に活動している女性を多く見受ける／女性会もそれぞれの賜物を活かして奉仕に頑張っている

【問題ありとする意見】

●家の中の役割分担がそのまま教会でも反映されているように見える／教会内で女性は「母」「妻」の役割を与えられることが多く、その奉仕は多岐にわたる。しかし高齢化に伴う疲れが見られる／女性会そのものの存在／教会内の主な役員は男性が担うことが多いが、食事の支度、お茶の用意は女性が行っている／女性役割として女性会の仕事と決めつけていることが多い。男性もこそって参加していく方向の方が楽しいのでは？／オーストラリアのルーテル教会は食器洗いを男女で自然にやっていた。日本は女性のみがやっている印象／働く女性が多い中で、いろいろな食事の手配など女性に任されるのは、おかしいと思う。教会はかなりそういう体質が残っていて、その点がっかり／食事奉仕はほとんど女性。男性にもやってほしい／飲食の奉仕は女性という空気を感じる／男性は片づけの手も貸してくれない。女性だけが教会で忙しくしている。もっと力と手を貸してほしい／働く時はいつも女性。力仕事も、高いところも寒いところ、暑いところも／女性も高齢化してるのに、男性は座っているだけ／食事の支度は必然的に女性の役割という考えが定着している／たまに男性が担当する日があっても楽しいのでは？／男性の料理もあっていいのでは？／お茶を飲んだ後片付け男性がしてもいいのでは？／食事作り、片付け男女で分担すべき。男性は当たり前顔をして座っているだけ／男性は黙っているけど、女性がするものという観念が強い。80歳を超えて体調を崩し、役割分担を果たしたいけれど辛いと思うことが多い／食事作り、後片付けは女性、重労働は男性となってしまう／食事関係は女性の仕事という感がある。性差、役割があることも事実だが、互いの思いやりと尊重の精神があるのが教会が一般社会と違うところなのでは？／集会後の片づけは女性の仕事と考えている男性が多い。年齢性別に関係なく働いた方がよい／月2~3回の昼食の用意は「女性会」が行っていて負担が大きい。女性会というと特に他者への奉仕を担わなくてはならないというイメージが強く、小さい子を抱えているものとしては入会を躊躇したまま今に至っている／子育てについても女性のみの役割でなく男性も積極的に関わる必要があると思うが、教会ではもっぱら女性のみという考えがある／教会清掃は女性ばかり、男性も奉仕できないか？／男女共同参画の時代だが、基本的なところでは(清掃、食事など)女性が担うところが多い／台所には女性会だけでなく男性も青年も入り教会員全体混ざったグループで働いた方が楽しいのでは？／男性会がない。男性がもっと活発に行動してくれば教会も活気づく／教会行事はまず女性

がやってくれるという雰囲気がある。男性ももっと積極的に奉仕にかかわってほしい／男性は仕事に責任を持っている人が多いので無理かもしれないがもっと教会に来てほしい。神の言葉を聞いてほしい／若い人たちの協力がほしい／教会内の行事奉仕はほとんど女性会員がやってる。男性は無関心。会員が少ないため礼拝前日の掃除奉仕は当番決めて一人でやってる。やりたい人がやればいと牧師は言うが少し違うのではないと思う。奉仕するものがないと礼拝は成り立たない／

- 病気を重ねた後、牧師先生に役割（女性会、掃除、草取りなどの奉仕）から外してもらおうよう夫が手紙を差し上げておねがいし、一切抜け出させてもらったら、教会に行くのが心苦しくなっている／牧師を孤立させたら教会の中が楽しくなくなるので牧師を支える信徒になりたいと思う。牧師の言いなりになるつもりはなく、ただ外部の方が教会の敷居をまたげる工夫をしたいと思っている

④女性牧師についての意見

- 役員の3分の2は女性、教会運営に積極的に関わっている。もっと女性牧師を育ててもいいのでは？
- 女性の聖職者が増えているが産休、育児休暇の制度の整備が気になる
- 女性牧師から聖餐を受け取らない人たちがいた（外国人宣教師等）
- 女性牧師の活躍の場を広げてほしい。活動したい希望を摘み取ってしまう教区、本教会の意識の固定観念（古い体質）があるのでは？
- LWFや女性会連盟の働きを通して女性牧師を育てる取り組みはなされたが本教会レベル、教区レベルに女性牧師および女性信徒の委員があまりにも少ない
- 近年、日本福音ルーテル教会に女性の牧師志願者が出てこないことが気になる。
- 職制による性差がある（女性は牧師になれない。）NRK
- 女性牧師が少ない

⑤そのほかの意見

- 夫婦で信徒の方の多くは、夫婦関係において男性優位の亭主関白な関係であり、教会においても夫の後に小さくというようなポジションであることが多い。
- 教会内では自由に言いたい事が言えているが、会員の中に

夫からDVを受けていても我慢している人がいる。

- 男女の区別は特に気にしないが、教会内の秩序は守るようにしている
- 夫を天に見送り現在単身。結婚生活時代からの継続で自身を反省し聖書の考え方（結婚生活の）を学びなおした。夫と共にこの意識で生活してこられたらと悔やんでいる。女性の私が自覚して自分を育てることができたら幸いだったと考える。自分を育てる努力をしつつ、教会生活の中で育つことに今更ながら努めている。
- 配偶者の協力で教会に出席できていることに感謝している
- クリスチャン夫妻が多く、信仰をもって、互いに尊重し合っておられる。むしろ男性の方が黙っていることもあるがそれはそれで均衡を保っているように思う。
- どの教会でも男性の信徒より女性の信徒が多いのはなぜだろうか？
- 女性の方が長生きするが、これも神のご計画なのだろうか？
- 女性の力のない教会は考えられないのでジェンダーは過去の問題ではないか？個人での立場では問題を抱えている場合もあるので支え合う姿勢を持つよう努めたい
- 男女を問わず歴史のある信者さんが多い中で、若い人のように自分の思っていることをすばつといえない弱いところがある。皆立て前ばかりで本音が言えないねと言ってる。前からいる人の存在感が大きい
- 男女に限らず喜びを持って仕えることができるかが鍵
- 教会は女性が増えつつあり、神様の視点から、女性とか男性とかという区別ではなく、一つの神様から与えられたいのちとして、さらに女性が生かされる場として発信していくことが必要。
- 正しいことは何か常に考える。聖書による正しいの意味に忠実に従いたい。
- 教会が楽しくてできるだけ行く。
- 教会が喜びと感謝にあふれた共同体であるためには、男性、女性互いに尊敬しあい謙虚さが必要と思われる。男女差別はあってはならない。教会内での交わりでは幸い気になることはない
- 自己主張ばかりすると神は裁かれるのではないかと思うので黙ってる方がいいと思う
- 受洗したばかりで自分は何をして喜んでいただけるのか、一歩踏み出せずにいる。すべてにおいて自信がない。ただただ笑顔で過ごしている

問2. ジェンダーの観点から「教会内で気になること」は何ですか？

例：女性は教会の大きな集会では男性を立て、黙っていることが多い他

【男性回答】 ●無回答 3名 ●特になし 4名

【問題なしとする意見】

- 男性であることで不自由や不利益を被ることはほとんどない。
- 女性の活動力に感謝／教会は女性がいないと成り立たない
- ジェンダーによる区別、壁は低くなっている。教会も女性会員が多く普段の活動は女性に負っている。役員、各担当責任、今以上に働いてもらいやすい環境作ったり、男の理解、支えがさらに求められる。
- 教会は他の社会に比べ女性が活躍できる場が広い。女性だからという理由で不利益を受けることはない。
- 女性も役員に選ばれ役員会での自由な発言により教会運営が行われており問題は感じていない
- 男女問わず活発な意見交換がされている／女性が大活躍、特に問題なし。男性がもっと活躍できるようにならなければと思う／女性が主流となって教会を支えているイメージが強い／女性が多くそれほど性差を感じない／現在は男女ともに平等に発言等されているし役員の割合もバランスが取れている／差別なく互いに家族の一員となっている
- 若者枠で働くことが多いため気にしたことがない
- 男女平等の勤務形態の会社に勤めていたので異性への対応には気を使っている

【問題ありとする意見】

- ジェンダー以前に個の信仰、個の確立が不十分であり、ジェンダーが形だけのものになっている。
- 役割が固定されている
- 小さな集会は女性中心のものが多い。大きな集会にも女性がもっと出て行ってほしい。
- 男女分けて活動すること自体に違和感がある
- 教会の運営について「女性だから」という理由で、どこか逃げて（関わらない、責任を負わない）部分を感じる。
- 圧倒的多数は女性だが役員はすべて男性／教会員構成ははるかに女性が多勢を占めていて、一部にしても発言権も強いがなぜか代議員等の要職は男性で、感覚は古典的／男性の発言の方が優位に受け取られる。女性は受動的な行動を要求される。
- 若者が少なく今後の継続性に不安
- 男性の方が小さくなっている

- 牧師の意識が男性中心ではないか。「牧師夫人」という言い方、奥さんは牧師に従属的存在？
- 50代の女性が元気がないように思う。60～70代は元気、なぜだろう？
- 同性同士で、ジェンダーの話をしようとしても（性役割の固定化など）、話がかみ合わない。

①その他の意見

- 教会はかつては女性の存在は小さかったが、これからは男性の存在が小さなものとなっていく中で、女性の役員選出の割合等も考慮してゆく時を迎えていると思う
- むしろ意識や主張が過剰にならぬよう配慮した方がよい
- 夫婦の片方がクリスチャンだと、もう片方は当然クリスチャンになるべきとの意見もあるが、「信教の自由」は侵すことのできない権利である。
- 男性はどちらかというと運営的な概念（管理など）を中心に考えるが、女性はやはりもっと実用的な局面を考えることが多い。その結果、行事の計画段階では男性は中心的な役割を果たすが、女性は実行段階で力を発揮する

問3. 生活していくうえで男性である、あるいは女性であることで 不自由や不利だと感じることがありますか？何でも自由にお書きください。

例：家庭内で妻だけがクリスチャン。夫は教会に行くことに反対はしないが、無言の圧力を感じる。家や親族の宗教行事を大事にする務めを怠らず、家事万端支障をきたさないよう気をつけ、子どもたちも巻き込まないという暗黙のルールがある。妻は夫に気遣い、ひっそりと自分の信仰を守り、教会でも遠慮がち。しかし加齢と共に、病や死の問題が現実的になってきて、自分の葬儀をどうしてほしいか、誰とも相談できず悩んでいる。

【女性回答】 ●無回答 113名 ●特になし 98名

【問題なしとする意見】

- 祈りを通して平安をいただいている。
- 女性であることに感謝
- 不自由ではない。女性としての特性を活かした生き方をしている。
- 自由がある／夫婦でクリスチャン。それぞれを尊重し自由になが道を行く
- 夫婦といえども別人格。神に対峙し祈り求めるのは一人一人。夫婦で教会員だがお互いを認め合って信仰生活を送っていくつもり。
- 夫婦とも若い時からクリスチャン。何事も相談して生活しているので問題ない
- 夫に導かれてクリスチャンに。自由。
- 夫もクリスチャンなので問題起らない／教会に通うこと、奉仕する際の後ろめたさは感じない
- 話し合っって平等な関係／夫もクリスチャンで、価値観も似通っているのであまり悩むことはない
- 夫婦共にクリスチャンなのでお互い気まずいことはない。夫から教会のこと、聖書のことは教えてもらっている
- 家庭は全員クリスチャン。教会では病気の時も男女関係なく祈っていただき教会にいて本当に良かった。教会が命。
- 家庭は男女同数。自分の立場を発言し互いのことを考えて抑圧的なものはない
- お互い精神的に自立しつつ思いやりを持って生活していけば内面的な幸福感が得られる。
- 年齢を重ねると自分だけがクリスチャンであることの不自由さが薄らいできた。遠慮がちな思いから家族の理解のありがたさに変化した。
- 結婚の時何が何でもクリスチャンの人と思ってかなえられた。仕事が忙しく教会から離れたこともあるが晩年は教会に

- 出席し家でも二人で聖書を読み教会で良い別れができた。
- 退職した夫が家事を良く手伝ってくれ助かる。が、洗礼受けたのに教会から遠ざかってさみしい
- 婦人の友愛読者会から教会に導かれ受洗。協力的だった夫も病床洗礼を受け遺言どおり教会で葬儀／母、いとこ、妹も受洗。身内が救われたことを感謝
- 家族みなクリスチャン、各自自由に過ごせるので感謝。自分の考え、やりたいこと等相談し、自分で責任を持てる範囲において自己決定。性のありようから不自由を感じることは殆どない。それぞれの立場を思いやり(時には自己主張でぶつかりあうこともあるが)家族の関係性を大切にすると、ジェンダーの問題は緩和される。相手を尊重することです。社会にあっても同様、女性であることをことさら意識したり卑下しない。むしろ女性であることに誇りを持つ。
- 夫の転職で仕事を辞めた時は女性であることゆえの不利益を感じたが、その後子育てが一段落したところで復職した。女性が意識して不自由、不利な環境は変えていく努力をすれば問題は解決できる
- 夫は宗教は違うが理解ある。支障のない信仰生活を送っている／自分のみクリスチャンだが家族の理解と夫の協力があり恵まれていると感謝している
- 夫は若いころは教会に通い聖書も持っているが、一緒に行くことはない。妻の信仰生活には協力的。
- 夫は一応クリスチャンだが、長い間礼拝には出ていない。長女も受洗しているが礼拝には行ってない。
- 若い時は自分だけがクリスチャンであるために夫や姑に遠慮して教会に出席するのも大変だったが、だんだん家族が理解してくれて、子どもも信仰を受け継いでくれて今は心おきなく教会のご奉仕ができて幸せ
- 自分の信仰を守り通すことには何の迷いもないが、家代々仏

教で育った夫は未信者であるので、死の問題については日夜考えさせられている。最後まで努力をし入信できるような祈りのみ。

- 婚家は仏教だったので闘いがあった。夫が家督相続を放棄したので、仏壇、墓から解放された。
- 我が家は全員クリスチャン。神の恵みをたくさんいただいて幸せに過ごしている。トラブルなく感謝
- 夫と共に受洗。夫は4年後に旅立ったが、天国と地上で共に祈りあえることに感謝。
- クリスチャンホームなので、家庭内では不自由や不利を感じない
- 以前は大変な関白亭主だったが、定年後、教会の奉仕で忙しく家事ができない私を良く手伝ってくれるようになった。神は必要とみてかたくなな夫を少しずつ「ジェンダー」とは程遠い人に変えてくださっている。現在進行形ですが「我と我が家は主に仕えん」(ヨシユア 24:15)のみ言葉に添っていききたいものだ
- 夫はクリスチャンではなかったが理解してくれて協力的、教会員の方たちと交わりもあり何の苦労もなかった。早く逝ってしまわなければ受洗したかと残念に思っている。今は孫や曾孫が時々一緒に教会に出るのでいつかと期待している
- 夫は私がクリスチャンホーム育ちを承知の上で結婚したので協力的、私も夫の宗教(仏教)を立てている。死後の墓のことではまだ話し合っていないが、葬儀は教会でしてほしいと話し確認している。

◎夫もしくは妻との関係の問題

- 例の通りの心模様
- 夫はどちらかと言えば仏教で良く葬儀のことなど話し合うがはっきり決めていない。伝道はなかなか難しい
- 何事も夫が考えたことは取り入れ妻が考えたことは駄目。常に夫が一番。
- 夫だけがクリスチャンでない。優しい夫は無言の圧力を感じているのではと反省
- 家庭内で妻だけがクリスチャン、夫は教会に行くことに反対はしないが自分は信仰に入らない
- 夫から信仰の自由があるので、教会に行く許しをもらった。葬儀やお墓のことも聞かれた。
- 夫より一歩引くという日常生活でしたが、不自由だとか不利だと感じたことはない
- 夫はクリスチャンではないが、教会出席への送迎の協力をしてくれた。自分は家事や家族のものに迷惑をかけない努力

をした。子どもたちは教会学校に出席しクリスチャンになっている。

- 夫は子どもたちの小児洗礼は受けさせたがらないが教会に連れてくることは何もいわない。私の葬儀は教会に任せることを承知している。宗教は本人が自分で選ぶべきと考えている。
- 夫のみ自由に思い通りにふるまっている。妻のみクリスチャンで夫のいないところで自由を感じている
- 家事はエンドレス。女性はいつも台所で働いている。自分のことは自分でしてほしい。フィフティフィフティでやりたい。
- 男女が同じでないとは感じているが、それが問題かどうかは別のこと。女性の方が家事、育児をし、家庭を管理しているうえに、仕事を持つと非常にしんどい。一番早く起き最後に寝る生活だが、家庭管理を半分にすることは望まない。夫はそういうことが下手なので任せられない。意識を多く持っているものがやらなくては仕方ないと思う。
- 夫婦そろってクリスチャン。教会のこともお互い意見交換している。ただ、男性、女性でないといけないことがあるので、そこは理解し合うしかない。
- 基本的に家事は女がし夫からの「ありがとう」の言葉がない。反面教師で子どもが家事を手伝う
- 60歳以上の夫婦の多くは昔の慣習を引きづっており、女性は男性の意見に従うのが常となっている

◎自己の確立が難しい

- 自分の意識が女性であることで、経済的、精神的な自立をはっきり目指さず、配偶者の男性に依存していると感じることがある。自己決定の欲求をあまり満たしていないまま、もやもやした状態になることがままある。
- 夫がクリスチャンでないので教会の役員を3年間続けるのは難しい。日本社会は男性中心なので女性が出産後も仕事を続けることは大変だし、夫以外の協力者がいないとできないと思う。有能女性がいても「おんなのくせに」という男性の声が聞こえてきそう。
- 夫をひきつけるだけの魅力が教会にない?毎月日曜日夫を残して教会に出ることは、夫は何も言わないが難しい。
- 結婚して有無を言わず夫側の先祖の仏壇を守らなければならないことに今更になって人生の矛盾を感じる
- 夫が長男で、妻だけがクリスチャンゆえの、世間的、人間的な問題を抱えいろいろ考える日々である。
- クリスチャン男性が結婚すると教会に来なくなるが、クリスチャン女性が結婚するとその夫や家族も教会に来るようになる。女性クリスチャンとしての生きざまを大切に、また教会

中でも女性が信仰的に強められていくといいと思う。家庭内の協力がほしい

- 妻のみクリスチャン。理解はしてくれるが教会に出掛けにくい時も・・・。夫がクリスチャンのところは妻も一緒に教会に行くし、み言葉を聴く機会も多いように思う
- 夫がノンクリスチャンで苦労したが、夫や子供もそれなりの苦労があったと思う。夫が先に亡くなった時教会生活に参加できると思ったが立ち直るのにカウンセリングに通った。夫婦で元気に教会に行く夢はかなわなかった
- 長男の嫁で一人だけクリスチャン。病気の体験から受洗したが、主人にはきちんと報告し理解してもらっている。それには私が教会生活で元気になり楽しそうだというメッセージが伝わらないと長続きしないと思う。また夫婦、妻としての立場を優先しなければならぬ時はそうしている。無言の圧力を感じることは仕方ないと思う。だから夫が悪いとは言えない。クリスチャンとしての葬儀を望み夫にも諒承してもらい感謝。あまりクリスチャンとしての立場を強調すると、家庭内のバランスがうまくいなくなるのでは？家族が自然に教会を理解していく方向が望ましいと思う
- 他宗教の人と結婚して、いつかは自由に教会に行けると希望を持ち続けて40年、やっと、今、その時が来た。しかし、ノンクリスチャンの家族に対してどうあるべきかは、これからの課題である。
- 夫は熱心なクリスチャン。熱心に勉強。自分は家事に追われ聖書の勉強もなかなかできず焦りを感じる。自分で自分の時間をもっと有効に作りクリスチャンとしての信仰を強めたい
- 妻が外出するときは夫に気遣い、家事をすべてやりこなしてから外出するが、夫は意のままに行動するのが当たり前になっている。
- クリスチャンホームではあるけれど・・・
- クリスチャンホーム、万々歳ではありませんでした。
- 夫は昔風にいばっている(母親がそのような教育をしたためと、ある程度思っている) いろいろ抗議しても怒るばかりなので、上手に立ち振舞っている。息子にはこれから女性も働く時代、家事も手伝うようにしつけている。
- 長男に嫁ぎ、家の宗教を固守している姑や夫に対しなかなか公に自分の信仰を言い表せず不自由に感じ、いつも自分のうちで闘いとなっている。祈りながら、神様の救いの時を待ち望んでいる。
- 結婚して間もなく舅より「おまえは耶蘇教か」と言われ、それ以来家族から白い目で見られ教会から離れた。舅がなくなる30分前「おまえが一番やさしかったぞ」と言った時は

涙が出た。義妹が『クリスチャンで優しいね』と言ってくれた時とても嬉しかった。主人は今は何も言わない。長男なので自分の作った墓に入るようだ。自分は教会で葬儀をしたいが納骨堂の購入はまだしていない。難しい。

- 仏教の家に嫁ぎ教会に行くことは反対されなかったものが見えない重圧に耐えてきた。義母がなくなり夫と二人暮らしで子ども二人ともクリスチャンとして生きていることが感謝、夫は大きい行事の時は教会と一緒にいってくれるが自信がクリスチャンになることはないと言っている。高齢になり死や葬儀のことを二人で話し合い、夫は仏教で私はキリスト教で葬儀を行うと決め、納骨はお寺と教会とに分骨したいと願っている。何でも夫と話し合いながら幸せにしている。

◎実家や義父母達との関係

- 理解してもらうのに時間がかかった。仏壇の掃除や正月盆など旧家のため表面的には穏やかに暮らしたいので、クリスチャンの自分が率先してやるが、日曜には教会に生き心の中心はクリスチャンとしての神が住んでいるという心の中心になる宗教心が大切と思って戦ってきた。
- 夫の両親が同居、健在中は夫に家事の協力は一切求めなかった。現在は二人だけなので役割は決めず助けあい補いつけている
- 父親が宗教に対する偏見があり、実家で教会生活の話はできない
- 夫婦とも教会生活をしているが、夫の実家の宗教に、こちらが合せて行くことはある。
- 結婚する時自分がクリスチャンであること、教会生活を守ることを告げた。夫の葬儀はキリスト教式で行ったが、いまだに夫の身内から夫がかわいそう等の声が聞かれる。

◎他の家族との関係

- 息子を教会に連れてくるのが難しい。特に中学から。無理に進めることは控えている。
- 日本のクリスチャンの多くが家族で一人だけの人が多い。聖公会のように信仰の継承が上手くいくよう牧師先生にも努力してもらいたい
- 結婚して2児を出産した次女はクリスチャンであるが、その夫が信仰なく、次女の例会出席などに無言の抵抗を示しており、次女の信仰生活が守れないでいる。また、2児の小児洗礼も困難となっている
- 夫と死別で信仰歴は長い、教会学校にも行っていた息子は、嫁の実家の宗教の方を重んじて教会行事に参加するこ

とを嫁が好まない。息子は教会に来ることを遠慮しているの
で、相談するのも悩んでいる。

- 子どもの頃、長男ばかり大事にされていた。子育ての時、女性に多くの負担を感じる。子どもを産むことは女性の特権であり誇りであって不利なことと思って欲しくない
- 義姉はクリスチャンホームで育ち教会関係の職場で働きお見合い結婚したが教会生活は許されなかった。教会生活を送れることを祈り願い求め、やっと何の支障もなくなってみると教会に足を向けようとしなない。なぜなのか気持ちの変化がわからない。
- クリスチャンになりたてで、二人の娘や孫たちに、信仰に導かれた喜びを感じてもらうために日々努力しているが、知れば知るほど自由が利かなくなってるジレンマに陥っている。周りの方たちの姿勢に自分のふがいなさを痛感している。
- 夫婦ともクリスチャンなので家庭的には問題ないが、実家での法事、今後の親の介護などを考えると、女性の肩にかかってくるのがいろいろあると感じている。

◎葬儀の件

- 教会に相談したい
- 寺に墓地があり夫も家族も妻は当然一緒にそこに入っている。葬儀を教会でお願いして納骨だけお寺にできるのか、お寺に先に相談すべきか
- 自分の生き方、死の問題は「最終的には教会におまかせすればよいから」の一言で済んでいる
- 加齢のためか、マイペースの行動が目立ってきた自分を疑っている。老病死を真剣に考える必要があるが、話し合いがまだよくまとめられていない。
- ノンクリスチャンの夫、家族にしっかり伝えておきたい
- 家が仏教なので埋葬の場所を悩んでいる。遺骨のことで悩むこと自体信仰的でないことは理解しているが。
- 夫はノンクリスチャン。妻の葬儀を教会ですることには反対してないがキリスト教墓地に埋葬することは、家の宗教が違うので承知してくれない。
- 夫は浄土真宗の寺の息子だったが僧にはならず、キリスト教の本も読んでいたので理解があった。親類もみな仏教だが、自分の葬儀はキリスト教式でするように子供達にはいつている。
- 二男が独立後クリスチャンになった。自分の葬儀は自分の教会か息子の教会で行ってもらおうよう頼んであるが、お墓は夫の入る墓に入らざるを得ないようだ。
- 自分も弟もクリスチャンなのであまり問題はないが子どもがいないので最後の始末をどうするかをしっかりと決めておきたい。

クリスチャンの姪に後見人になってもらうよう話している

- 自分だけがクリスチャンだが教会に行くことや信仰することを理解してくれている。ただ、葬儀のこと、お墓のことは心配。牧師先生、家族とよく話をしたい
- ほとんどの会員は見えが仏教で仏壇を持っており、そちらを優先している。偶像礼拝を何とも思っていない会員が多い気がする。牧師。教師はもっと徹底してキリストを伝えるべきだと思う。

◎教職者の場合

- 育児休暇1年、実母のサポート1年、2歳から保育園。日曜有料でベビーシッター預け。土、日利用できる保育園が近くにある教会への着任ができれば・・・

◎その他の意見

- 高齢となり、脳梗塞や脊柱管狭窄症を患い足が不自由。体力も弱まりこれからの教会生活をどうして続けたものか案じている。女性会の例会当番は行っている。
- 性差別はある
- 女性の教育に差別を感じる。体力的な差から不利を感じることもある
- 自身の能力のなさゆえの不自由を感じる
- 不自由を感じることはあっても、それは男だから、女だからという問題ではなく、自分自身の生き方、感じ方、考え方の問題だと思う
- 女性であるための得点、利点をより考える。女性だからと考えている時点で自分を自分で下げている
- 「男も女もなくギリシャ人もユダヤ人もなく・・・」との聖書の真の意味を理解することが大切
- 女性の方が日曜日長時間拘束される。男性の方がむしろ教会活動に没頭できるのでは？
- 礼拝だけでは親しみがわからない。もう少し個人的な会話もできるような交わりがほしい。家庭集会が多くあって欲しい。
- 家族で一人クリスチャンである女性の悩みなどは、教会内で話せる誰かの存在があれば、精神的に楽になれると思う。
- 家族で一人だけクリスチャンという場合、家族に対して信仰を勧める人は少ないように思い物足りない。
- 女性同士の励まし合い、応援しあいがまだまだ難しいと感じる。教会の中でそのことが実践され、ルーテルの女性のネットワークが国内外に広がっていくことを祈る
- 署名は妻でなく夫のものが求められる。
- 大きな交渉事や買い物などの場合不利と感ずることがある

- 一人暮らしなので病気や何かあった時困るかも。週に2回は教会に行くので行かないと牧師が連絡してくれる?
- 高齢女性は男性から見て美しくないのか、多く集まっていると「何だ、ばあさんばかりじゃねえか」といって男性は何の興味関心も持たないという態度が見られる
- 今女性が前へ出すぎている。自分の意見は持ったうえで黙って見守ること、昔の女性のいいところも必要と思う
- 若い人たちは数10年前から比べるとはるかに女性の地位、活動の場は広がっていると思う。都市部だけか?
- 多くの問題を抱えている方がいると思うがそれを語る雰囲気やチャンスがないように感じる
- 家族の中で一人だけがクリスチャン、もしくはそうでないことは、自分の大切なもの、信仰を守っていくうえでとても辛いことだと思うが、教会はまだその不安に応えきれていないと思う。
- 多忙の中にも時間を作り体調を整えて日曜朝、聖書を読み牧師の説教を聴いて、顔を合わせることはコミュニケーションと信仰を高めるのに非常に重要。高齢や病気で出席できない状況が少子高齢化の中で現実味を帯びているので、インターネットのストリーミング機能を使っての自宅で礼拝に出席する等の工夫が今後信仰を守る上で考慮する必要がある。
- 性の違いもあり男女の役割の違いはあると思う。得意分野の違いもある。ただそれによって不自由や不利だとはあまり感じない。自分の意思是伝えることができている。男性には言わないと気付かないタイプの人もいるので女性がしっかり意思表示することが大切。
- 最近個人情報保護により、あまり立ち入るのが信仰暦の長い人以外は個人のことはなかなかわからないことが多い
- 女性は良妻賢母であることを必然として社会一般から求められ、それにできるだけこたえて生活するよう努力することが良いと自分自身をそういう型にはめる生き方を当然のものとして受容しがちだ。様々なスタイルがあること、男性女性の役割や生活スタイルを女性の側から意識的にとらえなおしてみると、男性も楽しく生きる力生活の技に目覚めるのではないかなと思う
- 結婚する前の実家では、女性であり子どもであることでとても虐げられていた。過去のことで割りきろうと心掛けている。男性全員が横暴。自分勝手なのではなく、個人差と程度の問題。それぞれの悩み、それぞれの解決策がありそう。もし悩んでいる女性がいたら、声をあげて良いし、受け止めることが組織的にできるとよいと思う。当時私の悩みを誰に相談してよいかわからなかったし身近な人にも真剣に聴いて

もらえなかった。

- 母は女性は家事育児をするのが当然という認識で過ごしてきた。父は働いていることを盾に、普段から自分の好きなように過ごし母を手伝うこともなく、もめごとの最後には「働いている」という言葉を使っていた。最近はジェンダーという言葉が普及して、男女の差別は昔よりなくなってきている。昔の方が、子どもに男の子だから、女の子だから、という言い方をする人がいるかもしれない。
- アンケートの2つの例は、ジェンダーの問題ではないのでは?男性>女性という考えこそすでに偏っているのでは?ジェンダーに対する知識の浅い女性から男性へ対する不満、不平を集積するにとどまるのではないかと懸念する
- 男女は何も全部同じであるべきだとする考えの方が窮屈。体の構造や体が、また感情面でも、明らかに違う点がある。それぞれの特性を活かした生き方をすればいいのでは?ジェンダーというカタカナ語を使うこと自体に力が入っているようで、意図するところがよくわからない。男女のことより「私と神様」の関係の方が関心がある
- 妻、夫の役割があって昔人間の私から見ると、息子夫婦は、婦唱夫随のように見えて、これもまた少し不安になることも多い
- 重要なところはやはり男性中心となる。その方が楽と、女性も思っているようだ。
- 女性に向かって、上から目線で言葉を発する方がいて、がっかりすることがある。
- 日本の家父長制は昔ほどではないが、その家庭によって違いがあるだろう。日常生活の中で家族のコミュニケーションを心がけたい。また死の準備の一つとして「私の信仰歴・葬儀についての希望」等文章にして家族と教会の牧師に渡しておく。書くことで自分の生き方も整理されて良いのではないかな。

◎社会の中で

- 日本社会を見た時、女性の経済的自立は難しい、したがって社会的自立も困難ではないか
- 障害者グループ活動時代に日本が男性社会であることを痛感。いやでも男尊女卑を思い知らされた。
- 夫や自分の実家の仏教行事にきちんと参加するが、教会イースター礼拝を優先させたり、その時の状況で何を第一にするかは自分が決める。ジェンダー以上に障害者の不自由さ、不公平さを感じる。利害がからむと強いものに有利な社会になる。日本は男尊女卑でグローバルな視野の狭い国だ言わざるを得ない

- 女性蔑視が根深く残っている／家庭では妻の地位が低いことをいつも感じる
- 女性はこういうものだという先入観を持っている人が多く、そこから外れると奇異な目で見られる。一人の人間として男性も女性も同じという観点ななかなか受け入れてもらえない。自分は夫に遠慮することなく自由に行動しているがそうできる人は少ない
- 男性は「強く」女性は「おしとやか」でなければならないという雰囲気がある。
- 地域や社会全体で女性の地位や立場は低い。町内会長などリーダーシップは男性が取っていることが多い。
- 亡き夫は教会もキリスト者も認めてくれていたが、ただ一言、戦時中クリスチャンはどうして黙っていたのか、何をしていたのかと言っていた
- 学習サークル活動発表会の時、発表は男性に任せようとか懇親会では男性が女性より多く会費を払うとかありがち。平等でいい
- 子育て中は良く教会を休まなければならなかった。育児は母親の役目という夫の認識がたぶんにあったが、現在は女性学の発達もあり子どもたちが女とか男だからということから自立しているので、夫も考え方が変わり、ジェンダーの意味もわかってきて、私は過ごしやすくなっている。
- 一般的に60代以上の方に男尊女卑の感覚が見え隠れする。そういう時代に生き頑張って日本の経済を引っ張って来られたので今更直すのは無理のように思って感謝している。とはいっても16年前に夫をなくして気楽な生活をしているので、そんなことが言えるのかもしれない。
- 親の時代、社会全体の中に男女差別があった。女の子が生まれたら「すみません」と周囲に謝り、子育ても男の子優先、女の子は男の子の下に位置づける育て方をした（お風呂に入る順番など、姑に露骨に言われた）。それを思うと今、教会の中で女性が堂々ともものをいい男性に対して遠慮なくふるまうのは隔世の感がある。小さいところではまだ男女差別があるかもしれないが、今の世に生まれてきて良かったと思う。
- 社会的には、まだまだ女性には不利だと思う。しかし家庭の中では、役割分担がはっきりしているので不利と感じたことはない。お互いを尊重して生活している
- 話で聴く限り日本的慣習を背景として、女性が気持ちも含め不利になっているケースが多々あると思う
- 職場や自治会の集まり、葬式、法事などでは、女性として障害者として不利な立場でした。今地位向上が進んできた

- のはそのために励み戦ってくださった先達がいたからで感謝。また創造神のご計画と導きも感じる。教会で説教が聞こえる設備があることにも感謝
- 賃金面では男性の方が有利な部分はまだ多くの職場の実態。男女雇用均等法以降、女性の社会進出はごく当たり前にも関わらず仕事の内容や事務量に比較して、昇格、昇級にむすびつかないのが納得いかない。
- だいぶ改善されたが、まだ多少は男女格差が残っている
- 背広姿の若い男性がゴミ袋を提げてマンションから出てくると「よしよし」と思う。結婚している時は一度も夫にごみ出しを頼まなかった。本人もする気がなかった。自分で自分を縛って窮屈な生き方をしていたと反省
- なにがトラブルがあった時、女性であると侮られることがある。男性が自分の側にいてくれると相手の態度が変わることがあった。
- 仕事における女性の立場は不利と言わざるを得ない。わずかに、教師、公務員など一部の地位は平等性も高いと思うが、出産、子育ての環境を整えることが急務だと思う。
- 職場で時々いつらくなる時がある。男性ばかりで男性の感覚が嫌になる時がある
- どんなに仕事で働いて頑張っても、夫の年収と並ぶことができない。職業の格差と仕事復帰の難しさ。
- 男女平等といっても、意識がかわっていないのでは？DVで苦しんでいる女性は潜在的に多いのでは？
- 仕事で責任ある立場にあれば当然家庭に無理が生じ、家庭を大切にと思えば仕事はそこそこしかできない。妊娠、子育てを男性は女性ほど深く考えない。ただそれを経験できる女性は恵まれているとも思う。社会でもっと女性の視点に立ったサポート体制を作るべきと常々思う。
- 男女平等というスローガンはあるが、現実の社会（企業）は『家のことはすべて妻に任せ男はとにかくぎりぎりまで働く』ことを前提にすべてのことが計画され実行されると感じる。公務員や大手企業は若干様子が違うけれど、中小企業ではまだまだ妻は企業戦士を元気にして商場へ返す役割を期待されている
- 30代後半の未婚の娘。経営上厳しい小さな職場で管理的な役割を持ち能力を発揮して生きがいを感じてがんばっているがオーバーワークの毎日。男性なら結婚して家庭を持てても、女性でそういう働き方をしていたら結婚してくれる人はいない。社会では男性と同等かそれ以上に働く女性でないと認められないのに、家庭の中はまだ多くが男性上位という過渡期に生きる女性の生活環境は厳しい。

- 70年代、出産すれば保育所がない時代、女性が辞めるのが当たり前だった。最初の出産後6年してから27年間不正規雇用で働くしかなかった(転勤族) 法律や施策が不完全な過渡期だった。
- 小さい時から男の子だからこれ、女の子だからこれと決めて与えられジェンダーが刷りこまれている。
- 男女参画という言葉だけがまだ独り歩きしている気がする。
- 教会では男性優位ということはないが、社会では多々ある
- まだ男性の方が働きやすい社会であり、教会内でもその傾向はある
- 仕事上は、出産や子育てがらみでの不自由さがある。会社、社会の体制の問題が大きい。
- 地区の行事等の関わりで多少の不自由さを感じることもある。
- 今はむしろ男性と同等の仕事や生活ができるよう求められている

◎男性の回答

- 職場の若い女性達は非常に賢い、男性をリードできる資質を十分備えている。ジェンダーによる差を問題にすることがあまり意味をなさない時代になろうとしているのでは？
- クリスチャンの自分と結婚することになって妻が受洗した。問題ない。
- 普段男だから不利だと思うようなことを感じたりしたことがない。またあまり考えたことはない。ただ、男は自然と一家の責任を負わされ、また社会の一員としての責任を負わされていることを感じる
- 妻もクリスチャン。教会でも家でも男女の間で差別を感じたことはない
- 男女に起因する不利益を感じたことはない
- 妻と娘はクリスチャンではないが、無理せず少しずつ理解して行って欲しいと思う
- 妻は興味あるものの、子どもの頃の経験から教会に行くことに踏み切れない
- 映画館にレディースデイはあるのにメンズデイがない
- 家族はほとんど男性なので家庭内での不自由は感じないが、社会ではどうしても『男性だから』とか「男らしくない」と趣味などで縛られることが多々あるのが悩み
- 一人住まいのため特に不利はない
- 男女の差は雌雄としてはあるが、社会生活ではジェンダー・フリー、エイジ・フリー、レイス・フリー(性差別、年齢差別 人種差別のない) 社会であるべき。教会社会はそうあるべき。
- 妻が先に受洗し引っ張られて受洗した関係で、教会には無理やり連れて行かれる。不利だ!
- 不自由や不利を気にするより、役割や義務を志向した方が現実的でしょう。普通、性を変えるのは不可能なので。
- クリスチャンホームなので問題ない
- 日本の家制度のもとで、婿養子に入ったものがクリスチャンでいることの困難を感じている
- 会員の葬儀について、クリスチャンでない家族の理解が得られてないことがある。相談、説明するとか牧師、役員の案内が必要と思う
- 不自由と感じたことはないが、もしかしたら女性にとって不自由を感じさせているのかもしれない
- 個性を考えず、男性というひとくりにした考え方をする人が多く問題である。
- 定年後もっと家事特に料理に興味を持ち、食事の準備の分担をする必要を感じている
- 男性として決まった枠にはめられることに不自由を感じる。理想的にはそのような枠を無視して生きるべきだ。
- 独身であると、家事の負担が大変で困っている。神は女性を男性の助け手として想像されたのだから、結婚して、女性の手助けを受けながら生活するべき
- 妻から夫への配慮が多いようだ
- 女性専用車両など出てきたが、そこまで行う必要があるのか。